
ピコ&ピース

うな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピコ&ピース

【Nコード】

N2706Y

【作者名】

うな

【あらすじ】

少女は生まれつき欠落を抱えていた。この世ならざる法による欠落は結果として少女を超常的存在にまで昇華させたが、彼女自身はそれを望んでいなかった。少女の名は影宮瑠璃。己の欠落が“裏返り顕現した”『彼女』を回収し己の人生を取り戻す。それだけがその時の彼女の望みだった。

「わ、また失点なし？ 相変わらずすごいなー、影宮さんは。あたしなんか赤点一步手前だよー」「ねえねえ影宮さん、また女バスの助っ人頼まれてくれない？ ちーちゃん怪我しちゃってさ。いや、今度は嘘じゃないよ？ ホントに面子足りないのよ。だからお願いね？」「お前も分かってないなあ。いいか？ 影宮の最大の魅力はあのミステリアスさだろ。そりゃ浜田みたいな快活なものいけどよ、影宮ぐらゐの美人になるとあれぐらゐ無愛想な方が……って影宮！？ あ、いや、なんでもねえから気にすんなっ」

笑っていれば大抵のことは上手くいくと判断します。対人関係においての機微を知識としてしか認識できない影宮瑠璃という私は周囲に対して好ましい雰囲気醸し出すことでしか厄介事を回避する術を持ちません。無論、二者択一的な場面もいくつか存在しますが学園生相手のコミュニケーション……特に私的内容になるほど客観的に判断可能な唯一無二の最適解を導き出すことは極めて困難であり感覚で彼ら、あるいは彼女らと交流の出来ない私は不適切な行動を取りかねません。それ故に私は笑うのです。ちなみにこの場合の笑うとは微笑のことであり、滑稽な事象を目の当たりにした際に生じる呼吸の乱れを伴うものとは一線を画します。言うまでもないことです。四六時中笑い声を発する者はこの世界の一般的価値観では異端扱いされ、しばしば迫害の対象になります。ある意味私の微笑みと対照的と言えます。同じ笑うという行動を取り上げてもこれだけ差異が生れる辺り胎児作法というものはやはり難しいです。他人の行動理念がどうしても理解できない私にとっては数学？の計算式などよりも遥かに難解で、そして度し難い。確かに笑い声をノイズとして定義するのならそれは大多数の人間にとっては不快なもので

しかないのでしょう。ですが時と場合によれば笑い声はコミュニケーションを円滑にするスパイスにも成りえるのだと私は経験上知っていますし、『笑う門には福きたる』という諺もあるぐらいですから笑い声は単にノイズとして処理されるべきものではないと判断します。

「ではこの問五を、影宮さん」

お昼休み十五分前。空腹と春の日差しによる胡乱な思考を遮断したのは数学教師であり、我が三年C組の副担任である山田未央教諭でした。山田教諭はクラス全体の集中力が散漫になっていることを敏感にかぎ取り解法が複雑な発展問題を宿題にすることによって飛ばし、今回の授業の総括とも言える演習問題を数学の正答率九割を超える私に聞いてきました。相変わらずそのない見事な采配だと判断します。

「答えだけ言ってもらっても仕方ないから途中式も簡単に説明してくれるかしら。必要があれば黒板を使ってもらっても構わないから」
そう言って山田教諭はにこりと笑います。同性の私から見ても魅力的な、そして自然な笑顔です。行動理念は皆目理解できない私でも彼女の笑顔は視覚的に好ましく、彼女のファンクラブなるものが水面下で存在しているというのも納得がいきます。彼女が所帯持ちだという事実を知って涙を流した男子生徒の数は一クラスでは足りないというのも強ち戯言ではないかもしれませぬ。

「ん、じつと見たりしてどうかしたの？」

「いえ、問題ありません。黒板を使用しますので五分ほどお待ちください」

少し惚け過ぎました。私はすぐさま窓際最後列の自席から黒板に歩み寄り、事前に設けられていたスペースに白のチョークで計算式を書きだしていきます。

「うんうん。それじゃあ影宮さんが頑張ってくれてる間ちょっと休憩タイムにしようか。ほら、ぐーって伸びしてー。深呼吸。よし、目醒めたかなー？」

今年で三十路になると聞きますが、山田教諭の外見、仕草や言葉づかいからは他の教員の多くに見える老いを全く感じません。独身三十路と既婚三十路には天地ほどの差があるということなのでしょうか。

「影宮さん、あと三十秒ー」

……もつとも、こういう風にヘンにプレッシャーをかけるのは止めて欲しいのですが。

昼休みは屋上で過ごすことに決めています。クラスの方々に誘っていたいた時などは例外ですが、基本的には屋上に設置されているベンチの一つに腰をかけて購買で購入したパンを食べます。今日は四限が定時に終了したので人気商品であるロースカツサンドを購入することに成功しました。パック入りのいちごミルクと一緒にいただきます。

「今日は十全ですね」

運よく定位置のベンチも確保することができ、仰ぎ見る空は快晴。二週間と四日ぶりのロースカツサンドをこのような好条件の下で食すことのできる幸運を神に感謝せねばならないかもしれません。

「では……」

パックいちごミルクにストローを指し、ロースカツサンドを包むビニールの包装を解きます。値段は三百円と割高ですがカツに使用している豚肉が普通のカツサンドとは一線を画し、間に挟まれているキャベツもシャキシャキ感を失っていないのでそれだけ払う価値があります。パンがハードタイプなのも私の個人的嗜好に合致しています。

「いただきます」

一口かじり今日の出来を確かめます。

パンの固さと焼き加減 問題なし

カツの味付けと上げ加減 問題なし。

キャベツの歯ごたえとソースの絡み具合

問題なし。

「いい仕事をしていると判断します」

しっかりと味わって嚙下すれば自然と頬が緩みます。私はいちごミルクで一度口の中をリセットして一息つき、それとなく周囲を見回してみます。屋上に設置されたベンチの数は合計七つ。私が陣取る唯一南側に設置されたベンチ以外は複数人の生徒が腰をおろし、笑顔を振りまきながら会話に興じています。食事中の友人との会話は学園生活の中でも重要なファクターであるとクラスメイトの女生徒に聞いたことがあります。この光景を見る限りではその言は正しいのだと推測できます。何故重要なのか。それはやはり私には理解できません。彼らの会話の中に模試などに関する有益な情報が含まれているのであれば話は別ですが、ただの他愛ない会話に特記する程の価値があるとは私にはどうしても思えないのです。

「よ、影宮」

と、物思いにふけりながらパツクいちごミルクをストローで啜っていると思知った男子生徒に声をかけられました。

「こんにちは、光田くん」

彼は出席番号十七、光田司。元野球部副キャプテンで、春である今でも褐色の肌をした坊主頭のクラスメイトです。

「隣いいか？ 他に席あいてなくてさ」

「このベンチは公共物です。私の許可は必要ないと思いますが」

「えっと……座っていいってことか？」

「私に気を遣う必要はありません」

「そっか。んじゃ、お言葉に甘えさせてもらうか」

光田くんは人懐っこそうな笑みを浮かべながらベンチに腰を下ろします。三人掛けのベンチですので私の荷物がベンチの上に置かれてたままの状態でも特に問題はありません。

「へえ……影宮はロースカツか。そんなに細いのに意外だ」

持参したビニール袋からペットボトルの緑茶とコンビニのおにぎりを取り出しながら光田くんが声をかけてきます。私は暫く思考を

働かせ重要であるらしいファクターに手を伸ばしてみることに決定しました。

「物にもよりますがこのサイズのカツサンドのカロリーは四百キロカロリー程度です。そして成人女性が一日に必要な適正カロリーは千七百キロカロリー前後ですので私がロースカツサンドを食べなくても不思議はないと思うのですが」

「な、なんかすごいな。やっぱり女の子ってカロリー計算とかやってるもんなのか？」

「私に限定しての話なら答えはノーです。他の女子については情報不足ですので光田くんが直接聞くのが最適だと判断します」

「そっか。何にしても食べ物を計算して食べるってのは俺には縁遠い概念だ。飯が不味くなりそうだし」

「その意見には同意します。物事を計算し始めた時点で健全な感受性を発揮することは困難になりますから」

「もっとも計算しなかったところで私の感受性では他人の行動理念を受信することは不可能なのですが。」

「やっぱり影宮は頭いいんだなあ」

不意に光田くんが感心したような声で言いました。いきなり飛躍した会話に私の理解力はいかす、首をかき上げて問いかけます。「今の会話のどこに私の知能指数を測る要素がありましたか？」

「それだよ、その口調。すっげえ頭良さそうに聞こえるんだよ、それ」

「口調が、ですか？」

「上手く言えないけど、なんとなくな。実際影宮の成績が滅茶苦茶いいの知ってるからかもしれないけど。なんか個性的でいいと思うよ」

「いい、ですか……」

口調に関しては今までもクラスメイトの方々に色々言われました。曰く、堅苦しい。曰く、気取ってる。曰く、機械みたい。そのどれもが否定的な意見で、光田くんのように肯定的に捉えてくれた方

は誰もいませんでした。だからでしょうか、少し光田くんに対して親近感がわきました。

「一つ、質問をしてもよろしいですか？」

「お、俺に？ 別に構わないけど、そんな大したこと言えないよ？」

光田くんは意外そうに目を剥きます。私は一瞬何か不味いことを口にしたかと躊躇いましたが、思い至るところがなかったのものでそのまま続けました。

「光田くんは私のことをどう思いますか？」

「ぶっ！？ えっ、なっ、そ、それってどういっ……」

いきなり口に含んだ緑茶を明後日の方向に噴き出す光田くん。やはり私は何か致命的な間違いを犯しているのでしょうか。全く心当たりはないのですが光田くんの反応を見る限りではどうも適当ではない気がします。

「申し訳ありません」

「え、いや、なんで影宮が謝るの？」

「答えづらい質問をしてしまったのだと判断しました。先ほどの質問はどうぞお忘れ下さい」

ここは引くのが吉でしょう。少し冷静になって考えてみれば一人の人間という多数の要素を持つ存在を対象に「どう思う？」などという曖昧な問いを投げかけること自体が食事中に交わされるべきライトな会話とは乖離していたのです。全ては話題選びを間違えた私のミスです。やはり慣れないことはしない方が無難だったようです。

「あ、あのさ、影宮」

お昼休み終了十分前。私のミスからおそらく気まづくなってしまうた雰囲気を感じ取って沈黙を守っていた光田くんが口を開きました。彼も私も食事はもうとうに終了しており、ここにいるべき理由はありません。

「なんででしょうか？」

おそらくは席を立つに際しての挨拶だと思いますが、他の事柄に
関してもしれませんので汎用性の高い返事を選びます。光田くん
はすっ、と一度息を吸いぎゅっと目を瞑ってから立ち上がりました。
なにやら並々ならぬ覚悟がその顔に宿っているように思われますが、
何事でしょうか。

「さつき、つっても結構前だけど……影宮をどう思うかって質問あ
つたる？ 俺、ちゃんと答えるからちよっとだけ待ってくれ」

もしかして半時間近くの沈黙は返答を考えてのものだったのでし
ょうか。光田くんがここまで律儀な人だとは思ってもみませんでし
た。

「……よし。もう、誰もいないな」

光田くんが立ちあがってから三分ほど経過し、屋上から私と光田
くん以外の生徒がいなくなりました。様子から察するにどうやら人
がいなくなるのを待っていたようです。

「えっと、だな。まず最初に断っておきたいことがある」

「はい、なんででしょうか？」

「多分、影宮は俺のこと今年同じクラスになるまで全然知らなかつ
ただろうと思う。けど、俺は入学式の日からずっと影宮のこと知っ
てて、だから、その……別に昨日今日思い立ったことじゃなくて、
本当は影宮の質問に便乗するような情けない真似はしたくなかつた
んだ。でもさ、俺って大事な事は先延ばしにしちまう癖があって、
今言わなきゃずっと言えないようなきがしたから今言うしかなくて
……まあ、とにかく影宮にとっては急な話だと思うけど、驚か
ないで聞いてくれ」

光田くんの真剣な声に、口を挟むべきではないと判断し、彼の言
葉に肯定を示す為に一度こくりと頷きます。

「うん。それじゃ、言うからな……」

光田くんはまるで自己暗示のように呟き、もう一度目を閉じます。
そしてそのまま五秒ほど経過し 目が見開かれるのと同時に
言葉が生れました。

「俺、前からずっと影宮のことがす

」

きーんこーんかーんこーんきーんこーんかーんこーん

「……………」

「すみません。予鈴に重なってよく聞こえませんでした」

午後の授業もつつがなく終わり、今はS H R。所用でもう学園にいない担任に代わって副担任の山田教諭が連絡事項の伝達をします。「みんなも知つての通り一ヶ月後には学園祭があります。三年生は出店で飲食店をやるのが定例化してるみたいだから特に凝った準備は必要ないだろうけど、不備のないように気をつけてね。六月なんて中途半端な時期にあるのも三年生が参加しやすいように配慮してのことなんだから無様な姿だけは見せちゃだめよ」

山田教諭の言葉に教室全体が頷きます。五月現在、生徒会執行部を始め殆どの生徒機関は二年生に引き継ぎを終え、三年生はそれぞれの受験への準備をしている状態です。学園祭はそんな三年生が能動的に参加する最後の学園行事であり、学園生らしい思い出を作る最後のチャンスでもあるのです。もともと私にとっては然程興味を惹かれるイベントでもなく、むしろ他との温度差を嫌というほど実感させられる苦々しい時間とすら言えます。他者の行動理念が理解できない私には“自らの手で作り上げる素晴らしさ”だとか“集団行動での充足感”と言った類の感情がどうしても分からないのです。「それじゃ今日はここまで。光田くんは居残り。理由は……………分かるわね？」

山田教諭のお許しが出た途端速やかに教室を去る生徒、友達の席へと向かう生徒、居残りを告げられた光田くんを冷やかす生徒……。私はしばらく思索し、結局帰ることに決めました。昼休みに用件を言い損ね、何やらずっと悶々していた光田くんを待っても良かった

のですが今日は私にも外せない用事があったのでそちらを優先したのです。

「さようなら」

教室に残った皆さんに帰りの挨拶をします。疎らに帰ってくる返事はいつもの通り。十全です。

「また明日な、影宮」

少し遅れて返事をしてくれた光田くん小さく頷いて教室を後にしました。

学園から最寄りの駅までは徒歩十五分。そこから国営鉄道に乗り五つの駅を通過、六つ目の駅で降車して更に十分ほど歩けば私の住居に到着します。

「ただいま帰りました」

高級な部類に入る築二年の三十階建て高層マンション、その最上階の一室が私の自宅となっています。クラスの方々にこのことをお話しすると決まって羨ましがられるのですが実際は然程いいものではありません。無駄に高い位置に住んでいるせいでエレベーターに乗る時間が長く、あの密室を苦手とする私にはそれだけで住みにくいのです。

「おかえり」

リビング　　テレビとガラステーブル、一人用の白い皮張りのソファ以外は目立った家具の見あたらない簡素な印象。そこに極彩色の髪をした女性が煙草を燻らせながら佇んでいました。

「喫煙の際は窓を開けて下さいと申し上げたはずですが、これは私に対する挑戦と判断してよろしいのでしょうか南博士」

「だったら？　育ての親に手を上げるか？」

「いいえ。一週間ご飯抜きです。家事能力が天才的過ぎて錬金術の域にまで達した南博士にとってこれは直接的暴力よりも遥かに効果的であると統計から判明しています」

「あたしはそんな目で見られてたのか……いや、間違ってるとは言わないが」

博士はくすくす笑います。何かおかしいのか私には一切理解できません。

「それで、ご用件は？ 何かお話があるということでしたが」

今朝家を出た直後辺りに南博士からメールが届きました。内容は『寄り道せず早く帰れ』とのこと。連絡の有無に関わらず私は十中八九放課後に寄り道などしないのですが、そんな私にわざわざ『寄り道するな』と言うのですから逆説的にとても重要な話があるのだと判断できます。どうやら私の予測は間違っていなかったようで、南博士は「事務的なやつだな」とため息をついて一つしかないソファに座りこみました。

「単刀直入に言う。影宮瑠璃の欠落がかなりの大規模で具現化した。お前の学園で、だ」

電文的に事実だけを告げる南博士。その濁った青色の目には悲しみとも怒りとも諦観ともとれる、つまりは理解不能な感情が渦巻いています。私はどう答えるのが最善かしばらく思考し、結局本心を告げることにしました。

「それは僥倖です。今夜にでも回収して全てを終わらせ……そしてもう一度始めます」

私の本当の人生を。影宮瑠璃として約束されていた退屈で窮屈でどこにでも落ちていそうな普通の生き方を。

「僥倖、ね。瑠璃、分かってるのか？」

私の言葉に南博士は反感を抱いたようです。

「今のお前があるのは欠落のお蔭なんだ。存在欠落の補填……“そこにあるべきもの”を補うように世界の側から流入した代替存在によってお前は常人を遥かに凌ぐ能力を手に入れた。スパコンなんぞ比じゃない演算能力。虎やライオンと殴り合える身体能力。全身骨折を一晩で治癒させる回復能力。今回の欠落を回収すればその全てを失う。なあ、瑠璃よ。お前は本当にそれでいいのか？ 凡庸で非

生産的で塵芥のような普通の人間にわざわざ戻る必要なんてどこにある。多少欠けていたところで今のお前は人の範疇に収まっているんだ。なら、わざわざ衆愚に交わって無個性に生きるひつようなんてないだろう。違うか？」

南博士はどこか懇願するように言い、私を見つめます。青の濁った双眸の向こう側、すました顔の私が映っています。

「いいえ、違います。私は普通の人になり、普通の人生を歩むこととなります。それが博士の趣味ではないことは分かりますが、私にとってはこれが最良の選択だと判断します」

「あたしは今のお前が好きだ。それでもか？」

「申し訳ありません。こればかりは譲れませんので」

私がつっぱりと告げると、南博士は火のついた煙草を握りつぶし、部屋を出て行きました。辺りに漂う焼けた肉の匂い　とても不快です。

「ごめんなさい、博士」

小さく呟き、私は先ほどまで南博士が腰を下ろしていたソファに座ります。ほどなく、携帯電話に着信。差出人は南博士です。

『欠落は“他者の行動理念キモチを理解する”感受性。いつも通り欠落は裏返って具現化する。襲われるのは恐らくお前に対して強い気持ちを抱いている者。無理はするな』

「了解です」

自室に戻り、私はベッドに身を投げました。私以外は誰もいない完全に独りの空間です。

「少し、疲れました……」

理由はこれと言って思い浮かばないのですがやけに瞼が重たいです。昨日もきつちり六時間は睡眠をとったのですが、眠り方が悪か

ったのでしょうか。

「何にせよ仮眠をとる必要がありそうですね。えっと、目覚まし時計は……」

私は蜂蜜大好きイエローベアのベルを二時間後に設定し、ベッドに潜り込んで目を閉じました。ほどなく睡魔が段々と存在を大きくし、私を飲みこんでいきます

黒。私は黒の空間に囚われています。そこに他は一切存在せず、影宮瑠璃という『私』だけが独り漂っています。

“他者への寛容”それは最初から私には存在しなかった欠落。最も初期段階では“他者を知覚出来ない”というレベルだったそれはとてつもなく強大な欠落であり、その欠落分だけ私は常人からかけ離れていました。具体的に言うならあらゆる因果から切り離され、一切の干渉を受け付けない究極のヒキコモリでした。そして、欠落を補填する付加能力がそれほどまでに規格外であるなら欠落そのものも規格外であると考えるのが自然であり、実際にその通りでした。私から欠落した“他者を知覚する”認識力は所詮欠落でしかない自己を肯定するために裏返し“他者を知覚しない”ことによりそのアイデンティティを確立し、“知覚しようとする存在を知覚ごと消滅させる”という副次的防衛能力を以て自らに接近する全てを消し去りました。

彼女を知覚しようとする、私以外の全てを。

最後に彼女は私を消そうとしました。彼女の帰属すべき母体であり、彼女を欠落と定義する最大根拠である私さえ消滅すれば一つの確立した自己として確立できると判断したのかもしれない。しかし、結果として彼女の願いは叶いませんでした。私を消滅させようと欲するということが自体が私を知覚せねば成り立たぬことであり、

自動的防衛でなく能動的な意思を以て私を消滅させようとする
自体が彼女の自我同一性を崩壊させてしまったのです。結局彼女は
私の因果を瞬間的に正常に戻した後砕け散り、大半は私に回収され
ました。欠落と言うよりは半身と言った方が適当とすら言える存在
を取り戻し、私はようやく人としての規格に収まり、誕生から長い
年月を経てようやく人になることが出来たのでした。めでたしめで
たし。

「そんな夢を見たのですが、これは何かのお告げでしょうか？」

普段、学生鞆に付けている唯一の装飾品 黄色の棒の先端
に赤色で蛇腹状の円柱を二つ取りつけたもの。俗に言うピコピコハ
ンマーに声をかけます。大きさはだいたい手のひらサイズといつた
ところでしょうか。

「ボクに聞いたって分かんないよ。確かにボクは裏返ったまま砕け
散った欠片の一つ“他者への攻撃性”の一部を利用して作られてる
けど、ボクってという人格は博士が勝手にでっちあげたものなんだか
ら瑠璃の欠片については全然さっぱりさ。というか前にも言ったよ
ね」

少し怒ったような声を上げる彼の名前はピコ。正式名称はPCO
Dデバイスですが、そんな長ったらしい名前は百害あって一利なしなので私
は略してピコと呼んでいます。その名の通り欠落回収には欠かせな
い存在です。

「本当にピコは使えないですね」

「ストレートに酷いこと言わないでよ……」

「半分は嘘ですから安心して下さい」

「半分本音ってだけで十分キツイよ！」

時刻は午後八時過ぎ、私はピコを右手に乗せて人気のない学園
の廊下を歩きます、教員が残っていないのは確認しましたし、守衛
さんの巡回時間は事前に調査済みですのでこんな風にピコと会話し

ても何ら問題ありません。それにもし見つかったとしても怪訝に思われる程度で済むでしょうし。

「それにしても今日から始める理由なんかあるの？ 博士は瑠璃に強い気持ちを抱いてる相手が襲われるって言ったんじゃないかったわけ」

まずはその相手を探すべきではないのかとピコは言います。私もその意見には一理あると思います。しかし、はつきり言って探しても見つからない可能性が高いと判断しました。何故なら私には他者の行動理念が理解できないからです。理解できないものをどうやって判別し、見つけ出せというのでしょうか。そもそもそれ以前にそんな人物存在しないという可能性もありますし。

「ピコは私に強い気持ちを抱く誰かがいると思いますか？」

探索を終え、屋上へ。一年生の教室が集まる101棟の屋上から二十メートルほど離れた201棟へ跳び移りながら聞きます。ピコは間髪入れず、

「いるね、絶対」

やけに自信満々に答えます。私はふわり、と201の屋上に着地してから理由を聞きました。どうして？

「だって瑠璃はすごい美人じゃないか。人間のオスは見た目がいいだけですごい執着を見せるからね。強い気持ちっていうのが具体的にどんなレベルなのかは分かんないけど、瑠璃が誰からも思われてないなんてあり得ないよ」

何故か得意げにピコは言います。けれど私はイマイチその言葉の意味が理解できず首をかしげます。確かに綺麗なものに惹かれるという気持ちは理解できます。私自身山田教諭の笑顔などは好ましいと思いますし、絵画の類に心の揺らすこともあります。しかし、それが強い気持ち、すなわち執着という状態に繋がるかと言えば少なくとも私の場合はそうではありません。綺麗だと思っただけで所

詮はそれだけ。それを所有したいと思ったり、掛替えのない尊いものだと考えたりはしないのです。おそらくこれは私個人特有の思考で一般的ではないのですが、私の中にないものである以上は私に一般論は理解することはできないのです。

「ピコは綺麗なものが好きなのですか？」

「うん。ボク、瑠璃のこと好きだよ」

またも即答です。一切の迷いなく発せられた声は月明かりの照らす夜の中へ沁み渡るように消えていきました。

「ボクが人間なら真っ先にボクが狙われてる。それぐらいボクは瑠璃のことが好きだよ」

「ありがとうございます。ですがそれは

帰属本能から来る根源的な欲求なのでは？　と言おうとして、止めました。私にとってピコは唯一の家族と言える存在です。本当は南博士も数に入りたいのですが、今の私を好きだと言った彼女はその実私を嫌っているので数えないほうが賢明でしょう。ともかく、私は家族であるピコの好意を無粋な理屈で説明することに抵抗を覚え、いつもより感情を乗せた微笑みを作り、

「ありがとうございます。ピコ」

もう一度お礼を言ってから歩みを再開します。201棟は四階の窓のいくつかにガタがきているのでそこから侵入することが可能です。私は窓を吟味し屋上を囲った柵を乗り越えようとして、ソレに気づきました。

「ピコっ」

「ああ、間違いなくいるよ、瑠璃っ！」

肌が泡立つような強烈な嫌悪感を伴った風が前方、301棟から吹いています。301棟はいくつかの特別教室と三年生のホームルーム教室が集まった場所です。嫌な気配はA、D組のクラス教室と第二会議室の存在する四階から発せられています。301棟への侵入経路は一階の女子トイレの窓からのみです。濃密に欠落の気配が感じられる今、そのような遠回りをしていては“もしも”が起こ

らないとも限りません。

「窓を抜きます。協力してください」

「えっ、な、なに？」

「いきます」

柵を飛び越え、壁を足場にして跳躍。301棟四階の窓を目掛けて文字通り突進し、

「お願い、ピコ」

「ああもう、無茶するんだから！」

激突の刹那、茜色の淡光を放ち全長五十センチメートルまで巨大化したピコを大きく横なぎに一振りします。ターゲットにした窓は一瞬にして粉碎。破碎によって生れる音すらも粉々に破壊して私とピコは侵入に成功しました。

「うわっ、なんかビービー音鳴ってるよ!？」

「ただの警備システムです。気にする必要は皆無です」

守衛さんが到着するには早くても五分。欠落を回収し、襲われている誰かを救助するには十分な時間です。

「一撃で決めれば歩いて帰れます。帰ったらいっぱい褒めてあげますから頑張ってください」

「無表情で褒められても嬉しくないよ……………つと、見つけたよ！」

ピコが示したのは何の因果か私のクラス教室である三年C組の教室です。一瞬、褐色の顔が浮かびましたが、現実性の乏しさにすぐさま否定します。そんなことがあるはずがありません。

「いきますよ、ピコ」

「うん。出会い頭で即KOだよ！」

疾走というよりは跳躍。目的地までの距離を一秒足らずで詰め、ピコを一振りして戸を弾き飛ばします。そしてもう一度低く跳躍。

弾き飛ばした戸を追い越して目的 私と全く同じ背格好をした影に肉薄し、渾身の力を込めてピコを叩きつけます。

「っ—」

「邪魔、しないでえ！」

力の拮抗、そして反発。私の渾身の一撃を受け止めた『彼女』は憎々しげに、親の敵でも見るように私を睨みつけ、何故かそこにいる見知った彼をその背に隠すように立ちはだかります。

「逃げて下さい光田くん」

私は体勢を立て直しながらクラスメイトに告げます。しかし、彼は何が起きたのか理解できないのか、『彼女』の手を握り、

「何がどうなってるんだ、影宮？」

私でなく『彼女』に問いかけました。彼の上着は乱れ、その唇は月明かりをうけてやけに艶めかしく光っています。

「心配しないでいいんですよ、司くん。全部瑠璃に任せて下さい。すぐに済みますから、その後続きをしましょうね」

妖艶に微笑む『彼女』に彼は「ああ」と頷きます。私は二人の乱れた衣服とやけに熱っぽい眼差しからおぼろげながらも大体何があったのかを理解しました。

“他人の行動理念キモチを理解しない” 『彼女』が何故このような行動に出たのかは全く理解できませんが、私のやることに変わりはありません。私は影宮瑠璃が影宮瑠璃としての人生を取り戻すため『彼女』を回収します。そこに他者の介入する余地はありません。

「次で決めます。ピコ、準備を」

「う、うん。今度こそ！」

三度跳躍。光田くんを護るように構えた『彼女』は私の攻撃を回避することが出来ず、十分な加速の勢いを乗せた一撃は見事『彼女の右腕を回収しました。』

「ぐっ！」

「か、影宮!？」

突如飛び出す影。光田くんが『彼女』を守るように覆いかぶさります。

「瑠璃っ、このままだと！」

「っ、分かっていますっ」

私は連打で欠落全てを回収しようとしてはいますが、消失した『彼女』

の右腕を気遣うように身を乗り出した光田くんが障害となつて出来ませんでした。私は反撃に備えバックステップを踏み、もう一度距離を置きます。『彼女』及び光田くんとの距離は五メートル程度。一瞬で詰められる距離ではありませんが……。

「影宮！　しっかりしろよ影宮！　畜生、なんなんだよ畜生っ！！」

『彼女』を抱きかかえるようにする光田くんを避けて『彼女』だけを的確に回収するのは至難の業で　　そしてそれ以上に彼の

悲痛な叫びが私の動きを完全に止めてしまいました。

「大丈夫。大丈夫ですよ、司くん。瑠璃は、瑠璃は司くんの為ならこのぐらいへっちらですから」

「でも、右腕が！」

「大丈夫です。今すぐ取り戻しますから」

『彼女』はそつと光田くんの手を押しつけて私に対峙します。どうやらピコを私から奪い取って逆に私を回収しようとしているようです。

「瑠璃、来るよ！」

ピコの叫び。私は軽くサイドステップを踏み、直線的な『彼女』の突進を回避して隙だらけの左脚を回収します。

「きゃああー！」

『彼女』が叫び声を上げますが構わず回収を続行。左腕、右脚、そして頭

「やめろおおおおー！」

咆哮と共に飛来する椅子。ピコを使うまでもないと判断し、空いている左手でそれを弾き飛ばし、

「痛っ！」

物理法則に従い激突した椅子が私の左腕に強かに打ちつけられ、私は声を漏らしました。あれ？　と疑問に思う間もなく突進してきた光田くんに蹴り飛ばされます。

「瑠璃！　しっかりしてよ、瑠璃いー！」

痛い。とても痛いです。あり得ないほど、今まで経験したことが

ないほど。痛くて痛くて痛くて。どうしてこんなに痛いんだろうと考える思考すらかき消されてしまう程に痛くて。

「影宮！　しつかりしろよ、影宮！」

『彼女』を影宮と呼ぶ彼の声が傷口にじくじくと染みてこんな痛み知らない私は瑠璃はこんなに痛くて苦しくて辛いのは知らない知らないの知りたくないから私は瑠璃は影宮瑠璃という私は

「違うよ……」

立ちあがって、光田くん近づいて、私は叫ぶ。

「影宮瑠璃は私なの！　その子は違う、その子は私じゃないのになんで分かってくれないの!？」

「な、何を、」

「部屋が暗くて見えない!？　さっきまで抱き合ってたのがその子だからその子が影宮瑠璃!？　光田くんはなにも分かってない!　なんにも分かってないよ!　私を、瑠璃を好きならそのぐらいちゃんと分かってよバカあ!!」

さっきのお返しに蹴り飛ばした。痛みに顔をしかめる光田くんを無視して身動きの取れない『彼女』を完全に回収。ピコをキーホルダーに戻してスカートのポケットに突っ込む。

「早く立って。守衛さん来ちゃう」

「あ、えっと……」

「しゃきつとしろ光田司！」

「っ!？」

「続き、したいんでしょう!？　だったらさっさと立って逃げるの、分かった!？」

いつまでもへこたれている光田くんの手を引いて走り出す。身体は大きいくせに気が小さいのか、それとも豹変した私に戸惑っているのかは分かんないけど、とにかく情けない。

「か、影宮、だよな？」

階段を駆け下りながら光田くんが聞いてくる。私は小さく頷いて、

言葉を続ける。

「そうだよ。私が本当の影宮瑠璃。光田くんが見てたのは私の分身みたいなもんなの」

「ぶ、分身？」

「詳しい説明は逃げ切れてから！ 教室ぐちゃぐちゃにしちゃったし、窓ガラス二枚粉々にしちゃったから捕まったら停学になっちゃうよ！」

全ての階段を下りきり、昇降口に辿り着く。私は光田くんが靴を履き替えるのを待つ間に鍵を開け、退路を確保しておく。

「走るよ！」「ああっ！」

手を繋いで私たちは走りだす。校門まではそう遠くないけれど、焦りや不安が体感時間を随分と長く感じさせ　　どうにか学園の外に逃げ切った頃には心身ともくたくたになっていた。

「大丈夫か、影宮？」

「っ……………な、んで、そんなに平気なのよ……………」

「鍛えてるからな。第一、男と女じゃ基礎体力が違うだろ？」

「そう……………だけど……………」

「お、コンビニ。ここまで来れば平気なんじゃないか？」

緑の看板が目印のコンビニを指差し、一息つく光田くん。乱れた衣服を直しながらゆっくりとコンビニまで歩く。

「っらっしやいませー」

やる気のないバイト店員の声が出迎えてくれる。私は飲料水を購入。光田くんはなにやら小さなパッケージをこそこそとカウンターまで持つて行っていただけ、私にはそれを確認する余裕はなかった。

「……………それ、マジか？」

「信じるも信じないも光田くんの自由よ。私を頭のおかしな人と認識して避けるもよし、信じたふりをしえ付き合いを続けるもよし、私の味方になってくれるもよし……………好きにしなさいよ」

コンビニから駅までの道で私は光田くんに自分の出自やら今回の顛末の概要やらを簡単に説明した。反応を見る限り……多分光田くんは私の話を信じていないのだと思う。仕方ない。仕方ないとは思う。けど、そんな理屈じゃ納得できないキモチがあるのも確かだ。これは多分『彼女』の回収によって生じた想いなのだろうけど

「正直言つて、そんなお伽噺俺は信じられない」

だからだろうか、彼の言葉がやけに胸を締め付けて、私は思わず顔を背けてしまった。

「まあ、それが当然よね。というか、逆に信じる方がどうかしてるわ。こんなバカげた話を確固たる根拠もなく信じるヤツはお人よしのバカに決まってるし別に光田くんに信じてもらえなかったところで私は、」

そこまで言つた所で私の言葉は途切れた。

初めて感じる熱。感触。大きな手に包まれた頬がかあつと熱くなつて、それ以上に触れ合った唇と唇が蕩けてしまいそうに熱い。

「あ、あわわわ……」

キス、された。光田くんに。

「俺はバカげたお伽噺なんか信じない。けど、影宮のことなら信じられる。影宮の言葉なら何だって信じる」

ちよつと待つて何よそれいきなりキスしてカッコイイセリフ言つてそんな真面目な顔で信じてとかいつちやつてダメよそんなの反則反則反則私こんなの初めてなのに初めてなのに初めてなのに！

「み、光田きゅんっ！」

「きゅん？」

「光田くん！ わ、私ね、あの子の記憶も持つてるから光田くんが私のことどう思ってるかは大体わかってるつもりなのでただけでもできることなら可能なら光田くんの口から……その、ちゃんと、言つて欲しいの……」

「ああ。そうか。悪い、影宮……………いや、瑠璃」

下の名前を呼ばれた瞬間、鼓動が止まった。光田くんは……………司くんはそつと私の肩に手を置いて、優しく微笑む。

「好きだ、瑠璃。俺と付き合って欲しい」

言葉にするのがもどかしくて、司くんを抱きついた。とん、と小さく音が鳴り彼の身体が小さく揺れる。そして、どんな神の悪戯かは知らないけれど、彼がさっきコンビニで購入し、隠すようにポケットに突っ込んだ商品が飛び出して地面に落ちた。

私は何の他意もなく、司くんを抱きついたままその商品の名前を見る。月明かりが狙い澄ましたようにスポットライトを当てたそのパッケージには

『近藤さん』

という商品名がでかかどと書かれていた。

「あ、いや、その、瑠璃……………こ、これはだな」

「司くん」

「は、はいっ！」

「死ね」

「ひでぶっ!？」

その後のことはもう説明する必要もないと思う。言うけど。結局、私は人としての感情を取り戻す代わりに超人的な演算能力も身体能力も回復能力も失った。要はただの人間になったのだった。

「今回は調子悪かったねー。でも、受験本番までまだまだあるし、それでも学年上位なんだから気にする必要なんかないよ瑠璃ちゃん」

「やほ、瑠璃。いやいや今回は助っ人の話じゃないってば。うん、後輩連中ももう大丈夫だろうし単純に遊ばないかって思ってたさ。光田との進展も興味あるしい……………あ、こら、逃げるなー!」「いや、

だからな未央せんせも大人の魅力があつていいとは思つんだよ。けど俺としては瑠璃ちゃん飾らない可愛さも捨てがたいって言うか。いや、まあ両方とも相手いるんだけどさ……」

「相変わらず人気者だな、瑠璃は」

窓際最後列。高菜ドッグをはむはむしていると司くんがやってきた。私はマイペースに食事を進めつつ耳だけを彼の言葉に傾ける。

「変わつても変わらなくてもやっぱ瑠璃には人を引き付けるなんかがあるんだって思うよ。ホント、俺は果報者だ」

誰が聞いているとも分からないのにそんな恥ずかしいセリフを吐く司くん。彼は私が変わつたと言うけれど、実際私の行動が目に見えて変わったかと言えばそんなことはなくて。例えるならば間違いない程度か、要は気をつけて見ないと分からない程度にしか私の態度や仕草は変わっていないと思う。そしてその微かな違いすらも司くんと付き合い始めたことにより生れた副産物として処理される程度のものでしかなくて。

「私が変われたとするならそれはきつと司のお蔭だよ。そしてこれから私が変われるとするならばそれも絶対司のお蔭なんだよ」

対抗して恥ずかしいセリフを吐いてみる。司くんは顔を赤く染めてそっぽを向いてしまった。可愛いと思つた。けどそれを言うと怒るので言わない。可愛いと言われるのは健全な男子としてはなかなか気恥ずかしいらしいのだ。

「それにしても、平和」

筆箱につけたピコピコハンマーのキーホルダーを弄りながら呟く。窓から見える六月の空は珍しく晴れていて、この分なら明日後日の学園祭も大丈夫だろうと楽観的に思う。ピコが喋らなくなったり南さんにマンションを追い出されて新居へ引っ越したり『近藤さん』関連で司くんと喧嘩したりここ最近本当に心休まる暇がなかったけど、今は穏かな風に入っている。私を受験生である以上はこの安らかな時間はそう長くは続かないのだろうけれど、先に待つ困難

にだけ目を向けて今を悶々と過ごすのもバカらしい。正直、まだ他人のキモチなんて分からないし、これから先も分かるようになるなんて思わないけれど、他人を知る可能性を持つことで私は自分を知ることができた。影宮瑠璃という私を区分以外の方法で知ることが出来た。だからつくづく思う。人は独りでは決して生きることが出来ないし生きてはいけないのだと。あの時の『彼女』と司くんのように一切の理解なく求めあう関係になっってしまうこともあるし、現実にはその方が多いのかもしれないけど、それでも私は思う。独りの世界よりはずっといい、と。

「明日、楽しみだね」

そつぽを向いたままの司くんに声をかける。彼は「ああ」と小さく呟き、

「思い出、いっぱい作ろうな」

「またも恥ずかしいセリフを吐くのだった。」

「うん。思い出いっぱい作ろう」

だから私も恥ずかしいセリフを繰り返して、そつと彼の服の袖を握り、

ずっと一緒にいようね

そんな恥ずかし過ぎる願いを真剣に唱えながら、きつと今までで一番きれいな顔で笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2706y/>

ピコ&ピース

2011年11月6日05時23分発行